

さく影響し、イスラーム知識人たちの知的営為とその社会的活動は、確実に社会に影響を与えていった。現在の若い世代の間にも自分たちの知的系譜への意識がかなり見られるが、そうした知的系譜と各世代の知的形成過程を辿っていくことは、ポスト・スハルト期のイスラームを理解するうえで重要であろう。

グローバル化時代のイスラームにおけるハラール概念の展開

八木久美子

近年、十五億人とも二十億人とも言われるイスラーム教徒の消費者に照準を合わせた、「ハラール・ビジネス」への関心が世界規模で高まっている。イスラームにおいてハラームが禁じられたものを意味するのに対して、ハラールは許されたものを意味し、「ハラール・ビジネス」とは、イスラームの規範や戒律に配慮した商品を開発、製造、販売するビジネスのことである。グローバル化の進行により、非イスラーム的なモノや状況と接する機会が急増し、イスラーム教徒としての意識が先鋭化した消費者のニーズに応えようと世界の企業が動き出したということである。しかしながら、イスラーム法学上の判断の結論として出されるものであり、一律の基準で語られるものではないという本来のハラールのありようは、こうした市場の論理には不都合である。当然のことながら、一律の基準に基づいた、だれもが認める統一されたハラールの基準、あるいはイスラーム性の基準といったものが求められる。

そのために生み出されたのがハラール認証というシステムである。現在、東南アジアや欧米諸国、そして日本には複数の認

証機関があるが、それによって、第三者が権威を持つてある商品についてのハラール性を認めるという現象が生まれている。ただ現状では、個々の認証機関の基準にばらつきがあり、どの認証機関から認証をとるかという問題が残っているものの、マレーシアの国レベルでの認証がその厳格さにより信頼を得、世界基準となりつつある。こうした動きは、ハラールという概念に変容をもたらす。一つには今指摘したとおり、ハラールは一律に統一された基準に基づくカテゴリーへと変容しつつある。もう一つは、イスラーム法学とは行動規範であり、人間の行為について、その是非を問うものであるが、認証の場でのハラールは商品というモノに対しての評価であり、いわば商品規格である。さらに重要なのは、イスラーム法学では個々の行為を義務行為、推奨行為、許容行為、忌避行為、禁止行為の五つの範疇に分け、基本的な解釈では、ハラールは禁止行為つまりハラーム以外の四つすべてを指す。つまり特に神に禁じられたもの以外は、人間の行為は基本的にはハラールだという考え方である。しかしながら、ハラール認証の場で採用されている考え方はその逆だ。つまり基本はすべて疑わしいものであり、イスラームの規範に照らして完璧なものを例外として括りだすという発想である。

このようにグローバル・ビジネスの場に投げられることにより、ハラール性あるいはイスラーム性をめぐる理解は大きく変容しつつあると言えよう。しかしこれをもってハラール性あるいはイスラーム性の物象化と見るのは単純に過ぎる。なぜならば「ハラール・ビジネス」は二重の意味で拡大を続けており、その

先に大きな可能性が見えているからである。一つは今のところ、食品と金融という二つの領域が突出しているものの、教育産業やツーリズムまで含めた他の多くの領域にも拡大し、将来的には人々の生活の全方位に広がる事が予想される。もう一つは、人々が商品のハラル性あるいはイスラム性を認める基準は必ずしも豚や酒、あるいは利子の不在だけではなく、たとえばその商品の売り上げが慈善のために使われるなど道徳的な基準というものもあり、実際にそのような意味でイスラム性を訴える商品も生まれているからである。これには現在、世界各地で注目を集めているロハスやエシカル消費といった考え方と重なるところがある。つまり、商品を通して一つの信念や理想の下に生産者、販売者、そして消費者がつながる。日々の消費という行動を通して自らの信念を社会に訴えるという行為である。

この可能性を考慮に入れば、「ハラル・ビジネス」の台頭について、それをイスラム性がグローバル・ビジネスの論理によって変容を迫られたと見るだけでなく、一人ひとりのイスラム教徒を社会とつなぐ新しいチャンネルが生まれたと見ることもできるのである。

F・シュオンとW・C・スミス

中村廣治郎

F・シュオン（一九九八没）とW・C・スミス（二〇〇〇没）の対応関係についてはすでに種々指摘されてきた。ここでは前者の「esoterism」や「exoterism」、後者の「faith」と「tradition」の対概念について考える。シュオンによれば、宗教の現実態は

様々であるが、それらの言説を超えた主客未分の超越的な無文節的本質・「秘教」(esoterism)においては同一である（「超越的同一性」）。この本質、つまり「超存在」(Beyond-Being)が「存在」(Being)のレベルをへて現象世界に顕現する。これを「顕教」(exoterism)と呼ぶ。「顕教」とは、「秘教」を言語や象徴によって表現したもので、「伝統」(tradition)とも呼ばれる。人間はこれまでいづれかの伝統に帰属することで真理との関係を維持してきた。

他方、スミスによれば、religion (religio) は、元々、「恐ろしい力、それに対する人間の感情・敬虔」を意味していたが、近代を経てその概念内容は変化し、教義・儀礼・組織・共同体へと実体化され (reify)、またそれらの包括的名称となった。さらに近代の世俗化の流れの中で、religion は人間に本質的なものではなく、自由に選択可能な中立的存在となった。これは本来の religion の逸脱であり、この語をそのまま使用することは、この逸脱を容認し、宗教の正しいあり方・理解の道を閉ざすことになる。そこでスミスは、それに代わる語として faith と tradition を提案する。Faith とは、「(超越への) 信仰・皈依」という普遍的な人間の資質であり、それを表現し、保持・育成するものとして集積され、伝達されたものの総体が tradition である。両者は不離の関係にあるが、中心はあくまで人間の faith にある。Faith とは、この tradition が当事者にとってもつ意味なのである。

以上のような類似点も、より深くみれば違いも目立つ。まず、esoterism と faith についてみると、前者の顕現に階層構